中高生とともに差別と闘う

『ラスト道徳』

吉成タダシ

不確かな学習、命をかけた学習

ちょうどそのころ、「高校生友の会」のメンバーであるモトから次のような話が舞い込んできました。聞かされた高校での出来事は、息を呑むようなショッキングな内容でした。

ある日の高校での授業前、隣の席の親しい友達が話しかけてきたというのです。

「お前の所はやっぱり多いんだろ？」

「何が？」

「ブラクだよ、ブラク」

そう言いながら、それを指し示す仕草を目の前に示してきた友達。これまでに学習を積み重ねてきたモトも、『これが部落差別か！』と、一瞬ひるんだと言います。

「お前はどうなの？」

訊いてきた友達に、モトは毅然と答えます。

「オレもそうだよ」

「じゃあお前もかかってんの？」

「えっ？　何のこと？」

かみ合ってない会話に違和感を覚えたあと、友達から返された言葉は意外な言葉でした。

「エイズ、エイズ。ブラクってエイズのことだろ？」

「えーっ、違うよー！」

そう答えたところで授業が始まってしまい、このあとどうすればいいのかと相談に来たのでした。

どこでどう間違って、このような理解につながったのか。いい加減な人権学習の結果かと、背筋が凍るような思いになりました。「学級担任には相談しているのか？　人権教育担当の先生には言っているのか？」と尋ねながら、これからの進め方について話を詰めていきました。

結果的には高校に申し入れをし、これから前向きに変わっていってもらうためにも、当事者からていねいな聞き取りをしたうえで、全校体制の取組を進めていくということになりました。学校でされている人権学習が不確かであれば、差別をばらまく結果にもなりかねないというわけです。

「先生、中途半端な学習だったらせんといて」

何度も聞かされた、地区の方の言葉です。本当にその通りだと思います。いい加減なことをすれば、誰かを傷つけてしまうのです。魂込めて、命をかけてやるのが、この学習なのです。

ラスト道徳

お話を元に戻します。二〇一一年二月二十四日「ラスト道徳」が近づいてきたころ、生徒からこんな提案がありました。

「来週、最後の道徳の時間は、『今、みんなに伝えたいこと』っていうテーマで、みんなと語り合う人権学習をしたい」

この提案は、それまで誰も口にこそ出していませんでしたが、みんながどこかで持っていた共通した思いだったのだと思います。すぐに了承されました。

一週間後の授業、「ラスト道徳」の日の感想を一つだけ、先に紹介させていただきたいと思います。

「今日で本当に最後だったんだなって思うと、すごく悲しいです。三年間語り合ってきた時間は、これから先はもうないんだなって。あと十日ちょっとで卒業となると、さすがに実感が湧いてくるというか、今までのことが夢だったかのように思えてくるというか。私が意見言ったとき、本当はもっともっと優先して言いたいことがありました。でも、それを言うと泣いてしまいそうで、卒業式までとっておくことにしました。とかいって、家でいつもちょっとだけ泣いてるんですが。道徳の時間は、いつも時間が経つのが早く感じられて、今日もすごく早く感じました。このまま時間が止まってくれれば、もっとみんなといられるのにって思いました。九年間一緒にいていろんなこともあったけど、乗り越えてきて、そんなみんながいない生活は考えられません。卒業式、生まれてからこんなに悲しいときあったっけっていうくらい悲しくなると思います。卒業証書の授与が終わるまで、泣くのをこらえられるか心配です。涙腺がゆるまないようにする訓練でもしておきます」

父を堂々と語るマミ

「ラスト道徳」は、卒業式で卒業生40人、一人一人が発表する「別れの言葉」というセレモニーに引き継がれていくのですが、その前に、この授業で語られた発言内容を一部紹介させていただこうと思います。

一番に発言したのはマミでした。中学一年生のときからずっと、人権学習をリードしてきたマミ。自分の家族の中にある部落差別がなかなか言い出せずに苦悩した時期について、今あらためてみんなに告白するのです。

「父親のことを話したことは何度かあると思うんだけど、私は部落差別のことをみんなにずっと隠していました。差別をなくそうとか言ってきたのに、結局自分の目の前のことには向き合えてなくて、何か隠し事をしてるっていうか、嘘をついてるみたいで、後ろめたい気持ちでいました。周りの人が自分のことを話してくれているのに、人権について語り合おうって言ってる私が、結局自分のことは言い出せていませんでした。自分の父親が部落差別にあってるのに、そのことが言い出せてなかったことが、すごく複雑っていうか、何とも言えない気分でした。けど言えたとき、すごいもやもやした感じの気持ちみたいなものが、少し楽になりました。みんなが励ましてくれたから、向き合おうっていう気持ちになれたんだと思います。ぐちゃぐちゃになるんだけど、こんな私を成長させてくれてありがとう。すごく意地っ張りで面倒くさい私だけど、みんな、本当にありがとう」

（次回「進路公開」）

イラスト　中島　亜唯